歴史をたどる道

多良海道を往く

永昌宿
湯江宿
竹崎宿
多良宿

く

矢答峠
浜宿
鹿島宿
塩田宿

多良海道を往く
https://tarakaido.jp/
平成 29 年 3 月発行
令和 3 年 3 月改訂
編集・発行
歴史の道観光・文化交流推進協議会

デザイン／（株）イーズワークス
印刷／（株）インテックス

諫早市
（長崎県）
〒854-8601 長崎県諫早市高城町 5-10
（一社）諫早観光物産コンベンション協会
Tel.0957-22-8325
http://www.isahaya-kankou.com

太良町
（佐賀県）
〒849-1601 佐賀県藤津郡太良町大字伊福甲 3488-2
道の駅太良 観光案内所内／太良町観光協会
Tel.0954-67-0065
http://tarachokankou.web.fc2.com/

歴史をたどる道

多良海道を往く

◎多良海道を往く

多良岳

たらだけ

Tara-dake

神が宿る 神秘の山

長崎県と佐賀県の両県にまたがる「多良山系」は太古の昔、活発な火山活動によって形成された。火山としての歴史は雲仙や阿蘇よりも古く、最高峰の経ケ岳、五家原岳といった一千メートル級の雄大な峰々がつらなる。それらのほぼ中央にそびえるのが、ツクシシャクナゲやオオキツネノカミソリなど植物の観賞地としても名高い、標高九八二・七メートルの多良岳である。いにしえより信仰の山と崇められてきた多良岳の山頂には、太良嶽神社の上宮が鎮座。標高八五〇メートル地点には高野山真言宗の寺院「金泉寺」の堂宇が静かにたたずみ、全体が聖域であるような荘厳な空気をまとっている。

かつて多良岳のすそ野を縫うように
通じていた街道がある。
「多良海道」と呼ばれるその道は、
佐賀藩主らが長崎警備に向かうため
行き来したとされ、
また海上交通の重要地点でもあったため
商人の往来も賑やかだったという。
悠久の時を経て、
今ふたたびその道をたどってみる。

眼前には変わらず
悠然とそびえる神秘の山。
任務の無事の遂行を祈願する者、
航海安全を祈願する者……。
街道を行き来した人々は
神仏が共に宿るといわれる
この山の頂を仰ぎみて、
目に見えない生命の強大な力を感じ、
己の精神の糧にしたのかもしれない。

多良海道とは

長崎街道多良往還・多良道・諫早街道などとも呼ばれ、
永昌宿（長崎県諫早市）～塩田宿（佐賀県嬉野市）間の
総距離12里8町（約48km）のルートを指す。
途中、湯江追分からは
山あいのルートと有明海沿いのルートの二手に分かれるが
多良宿で合流する。
有明海沿いのルートを「竹崎街道」と呼ぶ。

「多良海道」諫早、佐賀。 歴史の道を今、たどる。

いさはや楽焼うなぎ

水路のある風景

諫早神社

始まりは諫早神社

長崎街道の矢上宿から三里半（約十四キロ）、長崎を発った旅人にとって第二の宿となったのが永昌宿だ。永昌宿はずれの永昌追分から大村宿への長崎街道と湯江宿への多良海道に分かれる。江戸時代、永昌宿には数軒の旅籠といくつかの商家があり、永昌追分には追分石・人馬継替所・駕籠立場があったという。

永昌宿を本明川の方へ下りていくと、諫早神社が見えてくる。諫早神社の創建は神亀五（七二八）年といわれ、かつては「四面宮（しめんぐう）」と呼ばれていた。明治になり「諫早神社」と改称されたものの、今でも地元の人からは「おしめんさん」との愛称で親しまれている。ここは佐賀藩諫早領の氏神様だったことから、諫早家の祈願所ともなっており、神社のいたるところで諫早家の家紋である「上り藤」を目にすることができる。

神社の前を流れる本明川には諫早大水害後に再建された飛び石がある。江戸時代は多良海道へ行くための斜めに走る別の飛び石があったそうで、皆、諫早神社で旅の安全を祈願した後は、その飛び石を渡って湯江宿へと向かったことだろう。

諫早城下で見ておきたいのは倉屋敷川が本明川に合流する附近にある「光江津（クワエつ）」。江戸時代、諫早領主や旅人はもちろん、出島や佐賀、柳川からの荷物の積み下ろしが行われていた重要な港で、大変賑やかな場所であった。光江津の近くに稲荷神社があるが、これは五ヶ所商人と呼ばれる長崎・江戸・大坂・京都・堺の生糸商人たちが建立したもの。長崎貿易で輸入された生糸はこの光江津へと運ばれ、全国に流通した。稲荷神社には商人たちの商売繁盛への感謝の気持ちが表れている。

諫早城下は由緒ある寺をはじめ見どころも多く、ゆっくりと散策したいエリア。この辺りは、江戸時代から「うなぎ料理」が有名で市内には数軒ある。うなぎは二重底になった京都の楽焼きの独特な器を使って蒸して仕上げるのが特徴である。

諫早城下を抜け湯江宿へ向かう途中、長田地区では水路のある風景に出合う。情緒豊かなまちの雰囲気は、旅の楽しみといえるだろう。

永昌宿（諫早城下）から湯江宿へ

本明川

湯江追分を境に
山あいのルートと有明海沿いのルートの
二手に分かれるが多良宿で合流する。
有明海沿いのルートを
「竹崎街道」と呼ぶ。

湯江宿から多良宿へ

湯江追分で分岐する

山の道を往く

多良海道を往く

湯江宿から多良宿へ

多良岳の清流は、太古の昔から人々に恩恵を与え続けている。

轟渓流

法川山和銅寺

川上神社

湯 江川の手前を左へ上ると法川山和銅寺がある。ここは諫早で最も古い寺として知られ、創建は和銅元（七〇八）年。寺名に元号が使われているのは諫早ではここだけという、大変珍しい寺だ。本堂の前に立つ古い仁王像や趣ある境内が歴史を感じさせる。本尊は十一面観世音菩薩立像で、六〇年に一度だけご開帳があるという。境内には龍造寺隆信の墓がある。有馬・島津連合軍との戦いに敗れ、島原で亡くなった隆信はこの寺に運ばれ、荼毘に付された。隆信は戦に行く前、この和銅寺でおみくじを三度引いて、三度とも凶が出て、家臣が諫めたにも関わらず、出陣したというエピソードも残っている。

和銅寺を下った所に、山伏が彫られた貴重な石碑を見ることができる。いつ誰がどんな目的で建てたものかは不明で、地元の人にもあまり知られてはいない。しかし金剛杖を手にした山伏は、多良岳が修験道の場であったことの証ではないかとして、近年注目を集めている。どこかユーモラスな雰囲気も漂う石碑は祈願のためか、供養のためか…。新たな研究に期待がかかる。

湯江宿は旅籠や造り酒屋が建ち並ぶ、大変賑やかな宿場町であった。宿内には上使屋跡が残っている。上使屋はお茶屋とも呼ばれ、幕府巡見上使や諫早領主などが宿泊した。湯江の上使屋は寛文十二（一六七二）年、諫早家四代領主茂真（しげざね）の時に建てられたといわれる。周囲を高い塗り壁で囲み、母屋は武家づくりの大きなかやぶき屋根で、敷地内には六頭の馬を入れる馬屋があったという。現在は残念ながら建物は残っていないが、古い石垣が往時をしのばせる。

海道を進み、川上神社を左手に見ながら行くと、追分に着く。「右たけざきみち　左たらだけみち」と刻まれた石柱の言葉通り、ここから竹崎街道への分かれ道が現れる。

湯江地区のある高来町は多良岳の麓に位置し、多良岳に水源を発する「轟渓流（とどろきけいりゅう）」は水量が豊富で、大小三〇余りの滝がある県下有数の清流である。名水百選に選ばれており、高来町は「名水の里」としても知られている。

多良岳からの清流が流れる湯江地区には、かつて「湯江紙」と呼ばれる和紙があり、産業として栄えていた。湯江地区で和紙の製造が始まったのは一八五〇年頃といわれ、佐賀の手漉き和紙職人が偶然立ち寄った際、この地の水の美しさに感激し、和紙作りを伝えたといわれている。品質の良い湯江紙は評判が高く、全国に流通するようになった。その後、最盛期には一三〇軒ほどが営んでいたというが、昭和四〇年代に生産が途絶えてしまう。しかし近年、この伝統和紙を復活しようと地元有志が立ち上がり、体験工房をオープン。現在は、紙漉き体験を楽しむことができる。

多良岳の清らかな水は、美味しい名物料理も生み出している。高来町の金崎地区には、先祖代々栽培してきた在来種のそばがあり、この地区の人々は昔から年の瀬になると、そばを打ち、日頃世話になっている人たちに振舞う風習があった。このそばの食べ方が独特で、丼鉢に茹でたそばと茹で汁を入れ、生醤油で味を調えたら、柚子ごしょうとネギを入れていただく。その食感から地元では「どろりそば」と呼ばれ、親しまれている。長い間、わずか十数軒の農家の人たちで食されてきた「幻のそば」は、近年まちの特産品として生まれ変わり、人気を集めている。有機栽培にこだわり、多良岳の名水で手打ちする麺は香り高く、美味。旅の途中でぜひ味わいたい逸品だ。

湯江の追分から山茶花茶屋跡までは、険しい道をたどる。いよいよ山越えルートがスタートだ。

一里塚跡

山茶花茶屋跡

金泉寺

猪ノ塔

江戸時代の面影を残す道

追分から随分と坂道を登ると左手にひっそりと佇む猪（し）ノ塔がある。石塔には次のような話が伝わっている。諫早家臣であった山口伊左衛門は鉄砲の名手で、千頭もの鹿や猪を殺生した。その供養のためにと、寛文三（一六六三）年、この石碑が建てられた。碑の右側には「ある朝千余の獣を殺害したことの罪に目覚め、供養の碑を造り身を清めて仏門に入る」とある。

猪ノ塔の先に、江戸時代に建立された太良嶽大権現の一ノ鳥居跡がある。追分からここまでの道は、金泉寺や太良嶽神社上宮への参道でもあったのだ。諫早家の日記の中にも、諫早家の正室が金泉寺へ参詣に行く際は湯江の港で降りて、この道を歩いて登ったという記録が残っている。一ノ鳥居は、明治七（一八七四）年の台風で倒壊したままになっていたが、平成二十九（二〇一七）年に復元された。

新しい道路が出来たことにより、多良海道自体がなくなっている部分もある。長坂と呼ばれる険しい山道を登り切ったところで、ようやく山茶花（さざんか）の茶屋跡にたどり着く。標高三九〇メートル、まさに峠の茶屋だ。眼前には雲仙と眺めがよく一服するにはとてもいい場所であっただろう。現在ではわずかに石垣が残っているだけだが、江戸時代の絵図には四、五軒の茶屋が描かれており、そこでは山芋ところや団子、餅などが売られ、旅人たちはしばしの休息を楽しんだようだ。かつて茶屋の西側の丘からは有明海を隔てて雲仙岳を望み、北東には多良連山を望んだというから、その絶景も旅人たちを喜ばせたに違いない。

茶屋で休憩した後は、なだらかな下り坂が続く。駕籠立場跡や一里塚跡を通り過ぎた辺りには、昔の道がそのまま残っている。この江戸時代の面影を残す道は、太良町の糸岐地区にある荒穂神社跡まで続いている。

海道途中にある石碑

太良嶽大権現の一ノ鳥居跡

海の道を往く

多良海道を往く

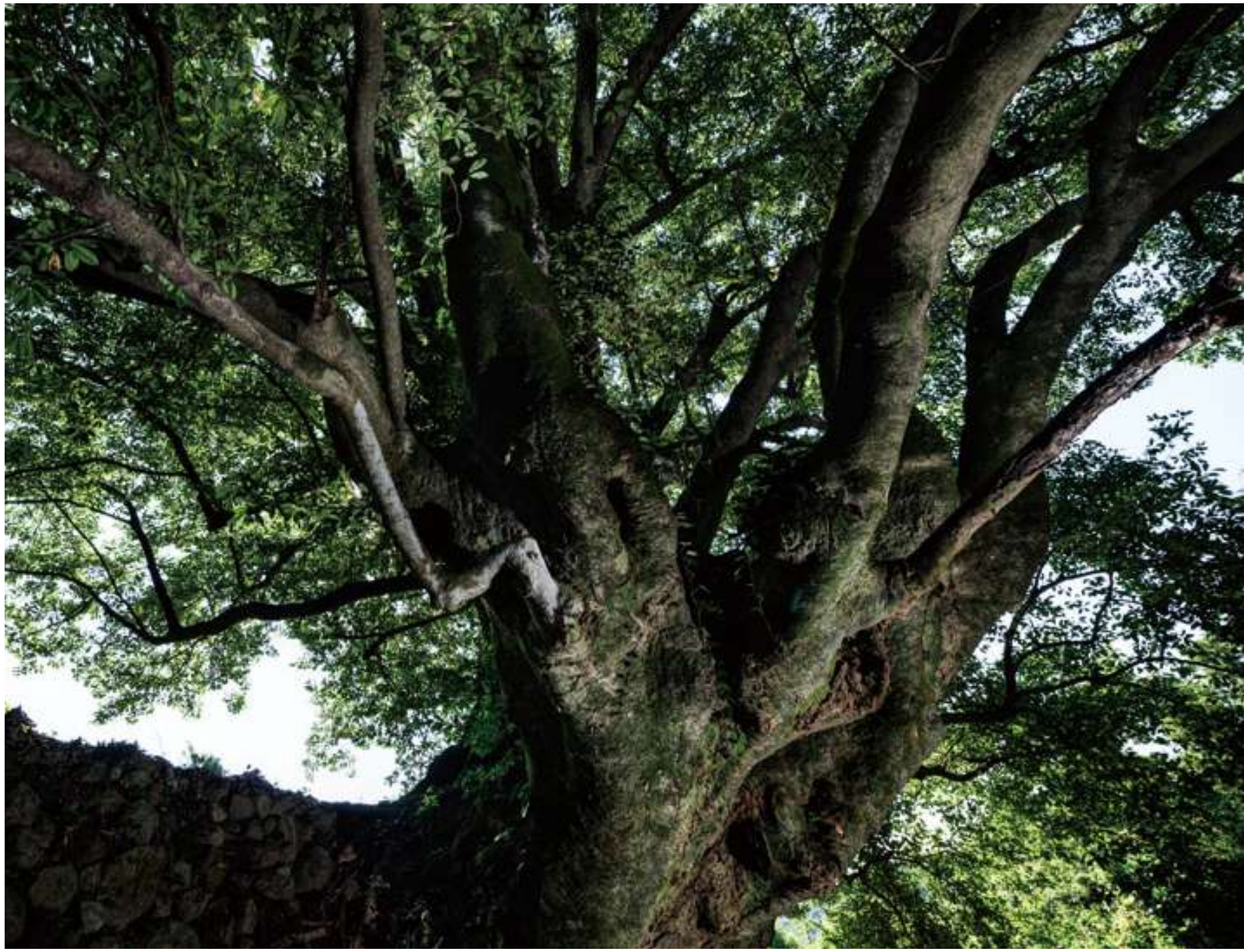
湯江宿から多良宿へ

多良宿へと続くもうひとつの道、竹崎街道

長戸鬼塚古墳

市杵島神社

小長井かき


小長井のオガタマノキ（国指定天然記念物）

湯 江の追分から右手に進むと、多良宿へと続くもうひとつの道、竹崎街道となる。竹崎街道の最初の見どころとして、市杵島（いちきしま）神社がある。石工として名高い小長井の武富氏が寄進したとあって、石垣の組み方に遊び心が見られるほか、独特の石門や亀と蛙をあしらった手水鉢など、随所に匠の技を見ることができる。

江戸時代、ここで諫早領主の愛馬が急死した。領主は大変悲しみ、その霊を弔うためにこの場所に堂を建てた。境内の左奥にある馬頭観音を祀った鮮やかな朱塗りの厨子には、諫早家の家紋が施されている。

街道から長里川を上流に、約一・五キロ離れた場所には、樹齢が千年以上ともいわれる日本一のオガタマノキがある。「オガタマ」という名前は「招霊（おぎたま）」の言葉が変化したものという言い伝えがあり、神を招く縁起のいい木として、今も地元の人たちに大切に守られている。神聖な雰囲気を漂わせながらも、葉をいっぱいに広げる元気な姿にパワースポットとしての力も感じる。二月下旬から三月上旬には可憐な白い花を咲かせ、また違った佇まいを見せる。

諫早ではいくつもの浮立が受け継がれているが、小長井の井崎地区の「まっこみ浮立」は現存する旧諫早領内の大浮立としては最もよく整っている陣立浮立であることから、県の無形民俗文化財に指定されている。まっこみ浮立は、渦状に円を描く「ビナ尻巻込み（まっこみ）」といわれる独特の形態が特徴で、その名の由来となっている。

小長井地区といえば牡蠣が有名で、冬には国道沿いにカキ小屋が建ち並び、別名「かき街道」とも呼ばれている。ぜひ味わいたいのは、二〇一二年に開催された「かき日本一決定戦」にてグランプリを受賞した「華漣（かれん）」。小ぶりながら重量感のある身は弾力があり、甘くてクリーミー。この地ならではの濃厚な味わいを堪能できる。

また有明海沿いには、古墳が点在しており、中には県下でも数少ない線刻画が施された貴重な装飾古墳「長戸鬼塚古墳」も見られる。鯨や舟と思われる線刻から、捕鯨の様子を描いているのではないかといわれている。江戸時代の道を歩けば、古代のロマンも広がっていく。

初めてなのに、懐かしく感じる竹崎の漁村。

有明海は干満の差が激しく、寄港できる場所が少ない。そのため水深が深く、満潮時でなくとも船を寄港できる竹崎港は、昔から有明海航路の要所として栄えてきた。それは江戸時代も同様で、湯江宿から竹崎街道を歩いて来た人たちや、諫早の光江津から船で来た人たちにとって、船を乗り継いだり、風待ちした重要な港であった。ここには竹崎宿がおかれ、上使屋や番所があったという。

竹崎には古い城趾がある。竹崎城は南北朝時代(一三七八年頃)に、島原の有馬泰隆によって築城された。この地域は戦国時代、有馬氏と肥前の龍造寺氏が攻防を繰り返した場所。城趾からは目の前に島原半島を望むことができ、この場所が攻守ともに重要であったことが伝わってくる。竹崎城は後に龍造寺家晴(諫早家初代領主)によって修築されたが、島原の乱の後に取り壊された。竹崎城の特徴は自然の地形を利用し、平山城と水城との性格をあわせ持っていること。現在見ることができる石垣や空堀は圧倒的な存在感で、竹崎城のスケールを物語っている。

竹崎城趾のそばには「竹崎城址展望公園」があり、展望台からは有明海を隔てて雲仙、大牟田、遠くは阿蘇の山々まで三六〇度のパノラマを楽しむことができる。

展望台の先にあるのは「夜灯鼻灯台跡」。竹崎は船の出入りに便利な一方、沖に出ると三角浪が発生し、海の難所といわれ、海難事故が絶えなかった。そのため古くから夜灯鼻には灯台があった。しばらく途絶えていたものの、寛延年間(一七四八～一七五〇)に諫早家臣、早田番左衛門が再建。しかしこれも文政十一(一八二八)年の大風で倒れた。その後、明治二(一八六九)年、番左衛門の五世の孫、早田市右衛門が再建。この灯台は日本の灯台史上初の十一面ガラス鏡式洋風灯台で、当時最新式のものであったという。

現在、竹崎は温泉や竹崎カニ、竹崎カキといった名物で知られ、年間を通じて多くの観光客が訪れている。竹崎カニは、昭和二十三年に石田仁一氏がガザミと呼ばれる渡りガニを「竹崎カニ」と命名し、料理屋をオープンしたことからブームとなった。ギュッと身がしまった竹崎カニは口いっぱいに甘味が広がる。また竹崎沖で養殖された大ぶりな竹崎カキは、焼いても身が縮みにくく、大変美味。現在、竹崎には竹崎カニや竹崎カキを楽しめる店が軒を連ね、観光客の舌を喜ばせている。

竹崎城址展望公園

夜灯鼻燈台跡

竹崎カキ

竹崎カニ

港からは竹崎山観世音寺まで、古い石段が続いている。

竹崎は約三〇万年前に火山の噴火によって出来た島。竹崎港は噴火の跡で、全国的にも珍しい火口港である。漁船が並ぶ静かな港の風景は、しばし旅の疲れを忘れさせてくれる。

港からは竹崎山観世音寺まで、古い石段が続いている。この石段が風情たっぷりで、なんともいえない情緒豊かな景色を作り出している。観世音寺は和銅二（七〇九）年創建と歴史が古く、昔から航海安全、豊漁、豊作の鎮護として地元の人々から厚く信仰されてきた。鎌倉時代には三十三の宿坊があり、大いに栄えたという。

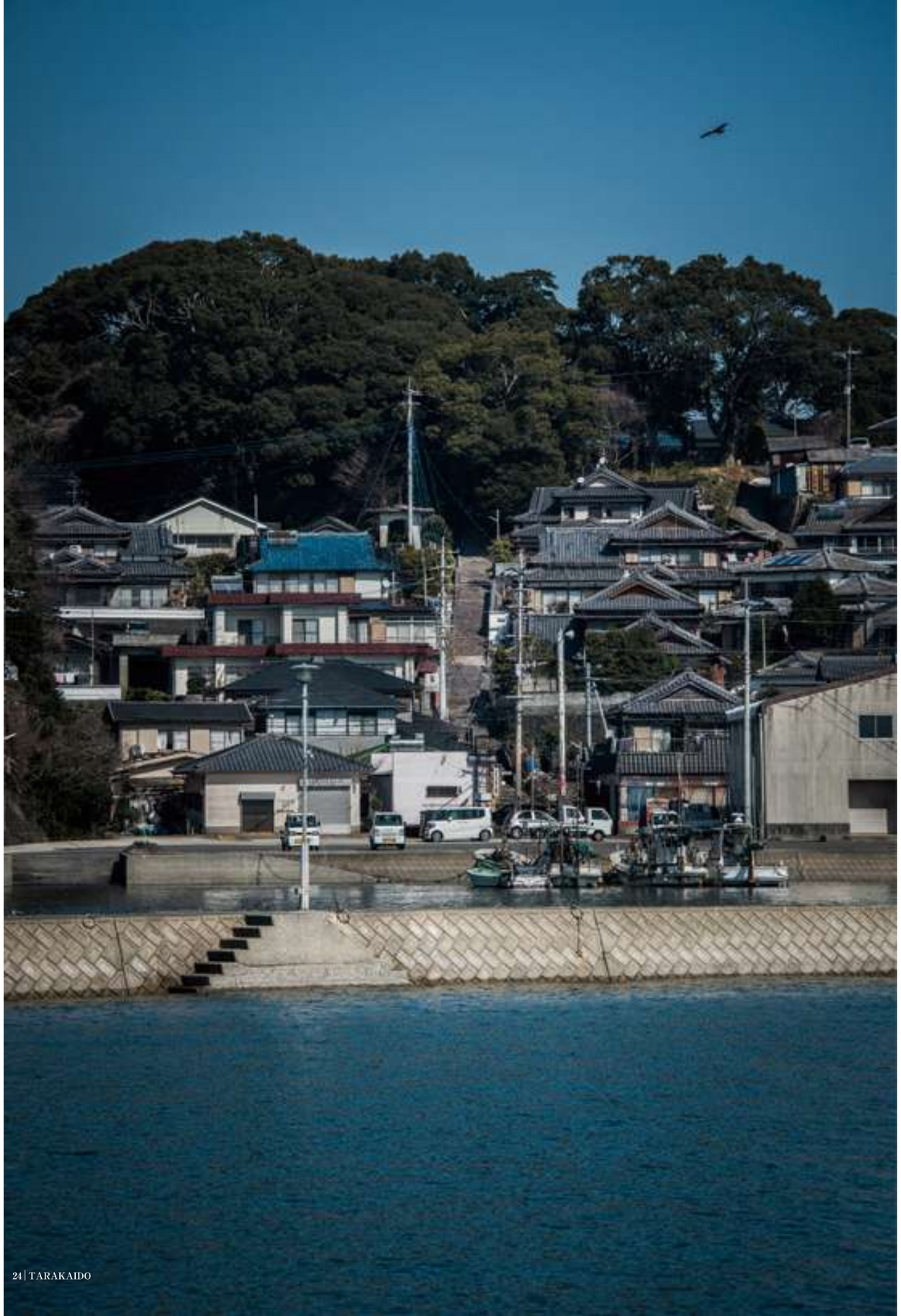
境内には数多くの石造物が残存し、この時代、多くの人々によって信仰されてきたことを物語っている。特に鎌倉中期の作といわれる石造三重塔は、九州では他に一例しかないという貴重なもの。その優美な姿は、日本の石造美術の一つの頂点を示しているとして、佐賀県の重要文化財に指定されている。

観世音寺では毎年正月の二～三日に「修正会鬼祭（しゅしょうえおにまつり）」が行われている。この地では竹崎の東端にある夜灯鼻の沖に住む鬼と、観音堂の箱の中に納められている鬼が手を取り合うと島がひっくり返ってしまうと信じられてきた。そこで二匹の鬼が出会うのを防ぎ、無事を願うために生まれたのがこのお祭りだ。華やかな行列、白鬼、赤鬼に扮した若者たちが繰り広げる男の祭りは壮観で、地元の人たちによって大切に継承されている。

竹崎山観世音寺

竹崎を出て、再び多良宿までの道のりを進む。途中、「休石（いけし）」という地で、大きな石に出合う。この地名には次のような由来がある。大山祇命（おおやまつみのみこと）と素戔嗚尊（すさのおのみこと）が船に乗って有明海を渡っている時に船が難破して、二人は漂流してしまう。そこへ大きなエビがやって来て、背中に乗せ、海岸まで運んできてくれた。ほっとした二人は大きな石に腰を掛けて休んだという。この石にちなんでこの地は「休石」と呼ばれるようになった。この辺りでは中休みのことを「なかいけ」と言うそうで、昼の三時になると「そろそろ、なかいけしようか」という風に使われているというから、「いけし」という読み方も、そこから来ているのだろう。

ここからは海沿いの道を多良宿まで、一気に進んで行く。



多良宿から矢答峠まで

再び山の道を往く

湯江宿から山越えのルートで、昔ながらの道を下ってくると、糸岐地区の荒穂神社跡に出てくる。神社の前の水田からは平安時代から鎌倉時代と思われる住居跡が見つかっているというから、この地では古くから人々の営みが見られたのだろう。

荒穂神社は昔から糸岐の産土神社として祀られていた。また「荒穂神社の大神様は浮立がとてもお好きだ」という言い伝えがあり、この地域では糸岐川を中心にして川北と川南に分かれ、二年ごとに交代で荒穂神社と浅間神社に浮立が奉納されている。

現在、油津の海岸に祀られている太良嶽神社はこの荒穂神社と多良宿の川上神社、そして多良岳の太良嶽神社の三社を合祀した神社で、瓊々杵尊（ににぎのみこと）、豊玉姫命（とよたまひめのみこと）、五十猛尊（いそたけるのみこと）・大山祇神（おおやまつみのかみ）を祭神としている。

糸岐川のふもとにある庄屋跡のそばを抜け、いよいよ多良宿へ。多良宿は最初、古賀に設けられた。そのため上使屋は古賀宿にあったという。しかし古賀宿はたびたび水害の被害に遭うため、上使屋は大魚神（おおうお）社の南にあった庄屋跡に移された。現在、建物は見ることができないが、樹高十メートル以上もある大きなソテツが残されており、往時をしのぶことができる。

大魚神社には次のような言い伝えが残っている。「昔、この町に悪代官がいて、里人に憎まれていた。村人達は代官を沖の島に置き去りにして帰った。代官は悔いをこの神に祈ったところ、大きな魚があらわれ（ブリ、ナミノウオの説もある）、その魚の背に乗って帰った。このことからその魚を大魚大明神として祀った。その奉賛として木の鳥居を、大魚大明神の前の石の鳥居と沖の島との間に建て、大明神の一の鳥居として区民や漁師から崇められている。昔から町の人々は大魚を食わず、大魚を担いだ商人も黙って社前を通り過ぎた」。（『太良町誌・下巻』より転載）海の中に朱色の鳥居が立つ風景は美しく、現在は撮影スポットとしても親しまれている。

大魚神社の海中鳥居

古賀の上使屋跡

太良嶽神社

荒穂神社跡

岳の新太郎さんの

下らす道にゃ
ざんざ　ざんざ
金の千燈籠ないドン
明かれかし
色者の粋者で気はザンザ
アラ　ヨーイヨイヨイ
ヨーイヨイヨイヨイ

円教寺

上使屋跡のそばには諫早一揆の集結場所として知られる円教寺がある。

事の発端は諫早家第八代領主茂行が佐賀藩主の世継ぎ問題に介入したことがもとで、謹慎蟄居を命ぜられた上、約四千石を没収されたことによる。佐賀藩の措置に対し、諫早領主を哀れんだ領民たちは、寛永三(一七五〇)年、佐賀藩主に直訴するため、五月三十日、海路と陸路から多良宿の円教寺に集まった。その数、一万三千人ともいわれている。集まった領民たちは六月一日朝、矢答(やこたえ)を目指して進んだ。これを聞いた諫早家の家老の三村惣左衛門が早馬を飛ばして領民たちを追いかけ、諫早領内の矢答でやっと追いついた。惣左衛門の必死の説得により、一揆は中止。惣左衛門と領民たちは、再び来た道を戻り、円教寺へと向かった。協議の末、領民たちは惣左衛門と誓約書を取り交わし、自分たちの村へと帰っていった。

この一揆で責任者五十七名が磔、獄門、切腹などの刑に処され、惣左衛門も切腹した。領主のために領民たちが一揆を起こしたのは大変珍しく、あまり例がないといわれている。

矢答の町境では昔から湧水が湧き出ており、道端には水置場がある。旅人たちが休息していたこの場所で、惣左衛門は農民領民たちを説得したのだろう。

多良宿より矢答に向かう途中に、岳の新太郎の墓がある。多良岳の東南麓一帯に広く伝えられている民謡に「ザンザ節」があり、地元では「岳の新太郎さん」と呼ばれ、親しまれている。

当時の多良岳は女人禁制。金泉寺の寺侍だった新太郎さんは月に何度か、用事のために里へ下りてくる。唄には、美しい新太郎さんに恋をした村娘たちの「山から下りて来てほしい、そして帰らないでほしい」という恋心がにじみ出ている。この唄同様、片峰地区にある墓もまた地元の人たちに大切に守られている。

矢答の水置場の裏には多良岳への道しるべが立っており、太良嶽神社上宮へと続く参道が見られる。そして、多良海道はここから塩田宿まで続いてゆく。

写真は、長坂(太良町)

多良海道を往く

歴史の道百選選定箇所
（大越～矢答・小川原浦）

永昌宿から湯江宿

- ○永昌追分
- ○諫早神社
- ○光江津（諫早津）
- ○長田地区の水路

湯江宿から多良宿／山越えルート

- ○和銅寺
- ○山伏の石碑
- ○湯江宿
- ○湯江の上使屋跡
- ○川上神社
- ○湯江追分
- ○轟渓流
- ○猪ノ塔
- ○太良嶽大権現の一ノ鳥居跡
- ○山茶花茶屋跡
- ○駕籠立場跡、一里塚

湯江宿から多良宿／竹崎街道

- ○市杵島神社（打越の馬頭観音）
- ○小長井のオガタマノキ
- ○長戸鬼塚古墳
- ○竹崎港
- ○竹崎城址
- ○竹崎城址展望公園
- ○夜灯鼻灯台跡
- ○竹崎山観世音寺
- ○休石

多良宿から矢答峠

- ○荒穂神社跡
- ○太良嶽神社
- ○川上神社跡
- ○古賀の上使屋跡
- ○多良の上使屋跡
- ○大魚神社
- ○円教寺
- ○岳の新太郎墓碑
- ○矢答峠

諫早までのアクセス

クルマ
福岡市内から約1時間40分／九州自動車道→長崎自動車道→諫早I.C
佐賀市内から約1時間10分／長崎自動車道→諫早I.C

高速バス
福岡市内から約2時間20分／博多駅交通センター→諫早I.C
佐賀市内から約1時間20分／高速基山→諫早I.C

JR
博多駅から約1時間30分／博多駅→諫早駅
佐賀駅から約1時間／佐賀駅→諫早駅

太良までのアクセス

クルマ
福岡市内から約1時間40分／九州自動車道→武雄北方I.C→太良
長崎市内から約1時間／長崎I.C→諫早I.C→太良

JR
博多駅から約1時間30分／博多駅→多良駅
長崎駅から約1時間10分／長崎駅→多良駅